



ロータリーは機会の扉を開く  
Rotary Opens Opportunities

2020-2021

第24回例会

RIテーマ

ロータリーは機会の扉を開く

Rotary Open Opportunities

クラブテーマ

原点から未来へ Get Back To the Future

会報

No. 1139

豊橋東ロータリークラブ

事務局：豊橋市花田町石塚 42 豊橋商工会議所内 TEL 0532-56-8566 FAX 0532-39-7520

会長：角谷 歩、副会長：西 崇秀、幹事：木所 壮太、出席・会報委員長：鈴木 康代

令和3年3月20日(土) 13:00~14:40※3月10日(水)より例会変更

例会場：桜丘学園本館3階 MCC メディアコミュニケーションセンター

担当：社会奉仕／青少年奉仕

ゲスト なし

| 出席報告 | 会員総数 | 計算会員 | 出席免除者数 | 欠席  | 出席率    | 1月13日修正出席率 | ビジター |
|------|------|------|--------|-----|--------|------------|------|
|      | 51名  | 45名  | 6名     | 19名 | 76.09% | 100%       | 0名   |

### 会長挨拶

### 角谷 歩 会長

今月で東日本大震災より10年目を迎えました。本日は追悼事業の一環として、気仙沼大島から臨時船ひまわり号船長菅原進氏をお招きしての講演会を、豊橋東RCと桜丘孫便りIACの合同例会として開催いたします。2年前のIAC設立以来初めての例会ということになります。振り返れば、2013年から4年にわたって東三河の高校生を引率して東北支援活動に取り組みましたが、気仙沼大島と当クラブをつないでくれたのは孫便りの会でした。職場訪問で桜丘学園を訪問し、支援活動に関する近藤洋子さんのスピーチをお聞きしたのがきっかけでした。われわれが引率したのは桜丘の生徒さんだけではありませんでしたが、その準備や現地での活動を目の当たりにして、関係は深まっていき、2019年のIAC設立に至ったわけです。今度は、気仙沼大島が当クラブと桜丘のつながりが深まるのを助けてくれたということです。その後、新型コロナ禍でなかなか連携活動は思うに任せませんでしたが、今日、はじめて合同で取り組める事業が菅原船長の講演会であることもまた、何かの縁であると思います。大震災当時には小学校低学年であったIACに皆さん、そして今日集まってくれた生徒会の皆さん、いわば「震災を知らない世代に属する皆さん」が菅原船長のお話を聞いて、何を感じ、何を考えるかをお聞きできるのを楽しみにしております。

### 本日のプログラム

東日本大震災10周年追悼事業  
奇跡の連絡船「ひまわり号」から東日本大震災を学ぶ

満田 康一 桜丘学園理事長 震災後10年間の節目として、復興支援を今後改めて繋がりを作っていく事を確認するうえでも、絆まつりをココニコにて開催しました。震災は何処にでも起



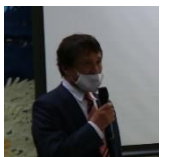
こる事で特異なことではなく、中からのその場での支援・外からの支援、繋がりが必要でとても大事なんだという事を、改めて次世代を担う子供達が体感し体験し、人と人との繋がりを知る事、平常では気が付くことが無い繋がりを気づくことが今後彼らの人生にとっての財産になり、社会の財

産になっていく事を教育会で支える身として強く感じています。今日のお話を聞く中で子供たちに新たなテーマが生まれる事を祈念して挨拶に代えさせていただきます。

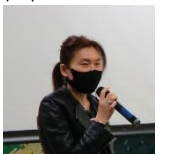
桜丘学園孫便りIAC代表 本日は、この様な講演会を開いて頂き有難うございます。被災した当事者の方から聞く貴重な機会だと思っております。しっかりと聞いて、現地に行くだけでは感じ取れない事を知りたいと思います。



川原 元則 社会奉仕委員長 僕が一人で話すには語りつくせない方で、笑顔が素晴らしい方です。船長の三人姉妹の次女の武田恵理子さんがいらしていますのでお願いしたいと思います。最後に言いたいのは、何事にも真剣で、ものすごくピュアです。そして命がけです。全てにそれを貫き通している船長です。



武田 恵理子 さん 東京から来た次女の武田恵理子と言います。父は昔、遠洋漁業で世界中七つの海を渡って、色々な方との出会いが沢山あり、ブラジルに3年、イタリアに3年と、機関長の仕事をしていました。人間でいうと心臓、船の心臓をずっと守ってきました。人との繋がりや命の大切さを父が話しますのて宜しくお願い致します。



菅原 進 氏 講演 震災の大津波を乗り越えるのは大変でした。乗り越えてからそのままでは、海に突っ込んでしまい転覆してしまうので後退したりして何とか維持でき、戻る時も



瓦礫が沢山でよけながら進み、その後8か月間無料で大島と本土を往復して、往復しながらご遺体を家族の元に返し続けたお話を聞きました。「自分が助かなければ人を助けられない」「笑顔が人を元気にする」「繋がりが大切」「笑っていれば病気も治る」「友達・出会いを大切に」と伝えていました。質疑応答では、どうして船を保存することになったのかとの質問に、小学6年生の生徒から船を残して欲しいとの手紙をもらい、保存を決めた事等を答えて頂きました。

原稿：柴田 國汎 さん / 写真：中澤 理 さん